『腹部エコーの活用によって 日常診療はどのように変化するのか？』

JCHO徳山中央病院 健康管理センター/小児科
内田正志

超音波検査（腹部エコー）は非侵襲的で、ベッドサイドで繰り返し検査でき、腹部臓器の大略を瞬時に把握できるので消化器疾患をはじめ、腎疾患、生殖器疾患の診断に威力を発揮する。非侵襲性（痛みなし、放射線被曝なし）を考慮するなら、小児の診療でもっと活用すべきである。画像の鮮明化や描出法の工夫により、消化管疾患の多い小児救急の場面においてもその威力（診断の迅速性と正確性）を発揮するが、普及はまだ不十分である。普及を妨げている要因はエコーが様々な疾患の診断に有用であることを理解することと、実際にエコーができることとは別問題だからである。実践が伴わないとエコー画像は理解しにくい。腹部エコーを消化器疾患の診断手順の中にしっかりと位置づけ、お腹の聴診器のように活用することが重要である。画像診断は正常像と比較して異常を判定するが、エコーも例外ではない。そのためには腹部臓器のスクリーニングを自分のものとし、プローブの当て方と得られる正常像をしっかりと把握することにつける。

私は『腹部エコーの活用によって日常診療はどのように変化するのか？』に対する答えとして、① 診断の迅速性が高まること、② 診断の正確性が向上すること、③ 不必要な検査を省略できること、④ 腹痛が苦手でなくなること、⑤ 診断の方向付けができること、⑥ 臨床症状と検査所見の重要性を再認識できることの6つを考えている。日常診療では腹痛をきたす疾患によく遭遇する。短時間で撮像できるため腹部CTに走る傾向にあるが、放射線被曝を常に考慮し、腹部エコーをもっと活用すべきと考える。実際に経験した症例を通じて解説したいと考えている。

【略歴】

大分市出身。山口大学医学部を1977年に卒業し小児科に入局。小児科診療と腹部エコーを研鑽し、1994年から徳山中央病院に赴任。2022年から健康管理センター長を務めています。小児領域への超音波検査の普及をライフワークと考え、様々な活動を行っています。2014年に小児領域への超音波検査の普及を目指す仲間とともに日本小児超音波研究会を立ち上げ、2015年に第1回日本小児超音波研究会学術集会を開催しました。